



冊數	書名無言抄	函號 二 一三六	部類 字書
二			

中村俊定文庫
文庫 18
20
2

一五七一



湖上之木 夫之下

湖上之木 夫之下
三 四季詞

湖上之木



女言抄卷之下

三 四季詞



四季九ノ花郭云月雷亦乃あり移ハと好ク
志乃方也ハ不入他家 勢をまゝ一ノ一ノ内
くとりまはすハ物くるるととハ記お不記也ハ
上巻抄乃ハ詞乃うらと由前子信之又分や
まき年ありあり

春

ハ第ハ身居祓祓と端ハ以時節の
以方ノ物

早とこころ

とよま早也天子ハ天
地冥とあり

寅乃時也清涼殿
あり一

屠穀白敷

夫子一依一

くろし乃綿

此衣取踏弁乃時のまきり

御薪

正月十五日百石薪とてすくろし

賭弓

正月十八日村よ乃所らにまきりあり

松乃祀

初曇りありむきり

松の縁

同日こきり曇りすく松を

松

祀をいひての曇り松の報あり

柳

雪にいひての曇り

氷乃い月

とふかありぬきり

雪月取の雪

曇り雪乃名取雪乃家か

ゆりありありと遊人なりすいしく物々あり
きすといり不審きり難安ありきり雪乃
まつての冬きりとも雪乃きりハ曇りつさ致
水乃い月 曇りぬきり

あひら

とぬきりぬきり

尚代

水邊ありぬきり 依保地 祀祇りあり

霞乃洞

院の四布乃 春乃文 曇りありあり

初年祭

二月三日 春日祭 二月上申日

ありぬきり祭ハ初といふと曇りあり

まぐろ乃すし記 蘆乃角心

ひこま カ編まやまにわすいそゝの類ま 列りあき

秋乃焼原草干燻物と燻烟をく

まゝの類いりまきなり

まぐろ乃 山田乃

空乃魚干 まゝの類

日乃あさり まゝの公まやまにわすいそゝの類ま

東風 まゝの類いりまきなり

みま類なりぬけ無洗耳よ少類 まゝの類いりまきなり

比乃乃沖核 と已乃日や日己乃日

いせ中 いとあきなり 馬乃 まゝの類

けろふ乃ゆり まゝの類いりまきなり

馬乃 まゝの類いりまきなり

馬の まゝの類いりまきなり

枯乃乃霜 まゝの類いりまきなり

梨乃 まゝの類いりまきなり 正記也

まゝの類いりまきなり

花うさ

句

花紀条

花乃嘆此疫非が
教して人々をさす

まゆりうらなわとけけんあままり

花うさ まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

心乃花 まゆりうらなわとけけんあままり

まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

花 まゆりうらなわとけけんあままり

文 ふらふらしたるしむるまきなり

さしきし しとをあらたせりゆくまきなり

三冬ついで春 ふらふらしたるまきなり

春と魚 まきなり

まき まきなり

春 まきなり

夏

更衣 まきなり

袷 まきなり

大袷 まきなり

福 まきなり

平 まきなり

松尾 まきなり

廣 まきなり

灌 まきなり

音 まきなり

眞梁 ヤガ へい まやうり

葛蒲

折こりり少くまじりてたまはる
端午よ六府あやめ乃いこを
角殿の

くま玉

いさくれあうてはくろあまり

木乃乃葉

草たろをる

あまら

樓

こまのねき

あまら

長楓ハこのまら

常盤木乃乃葉

木乃下

あまら

草

あまら

茂りあふ

枝乃下いふらふまらて

さくさくあふ

あまら

鴨乃草

あまら

まよひ心

あまら

蓮

あまら

まよひ心

あまら

あまら

あまら

杜若

あまら

あまら

あまら

和布ハのハ

ハ夏より

西ハのハ

日安夏より

つりハのハ

藻ハのハ

うハ草の

うハ草の

うハのハ

日ハ草の

海松

ハハ草の

田ハのハ

玉ハのハ

ハハ草の

くらハのハ

ハハ草の

芳竹

夏ハ竹の

梅ハのハ

ハハ草の

夕ハのハ

ハハ草の

電ハのハ

汗 薰風

ハハ草の

氷ハのハ

ハハ草の

さハのハ

醴酒

ハハ草の

祇園ハのハ

ハハ草の

涼

ハハ草の

清水

ハハ草の

泉殿 たけのこ 月乃涼 いづ 記 多涼

秋の常 とくもまや秋なりこい 記 あし

明 あき 乃 の 記 あき

あ あ 乃 の 記 あ

み み 乃 の 記 あ

御 おん 乃 の 記 あ

あき 乃 の 記 あ

秋

一葉 いちえつ 乃 の 記 あ

柳 やなぎ 乃 の 記 あ

桐 きりぎりす 乃 の 記 あ

初 はつ 乃 の 記 あ

星 ほし 乃 の 記 あ

乃 の 記 あ

紅葉 もみぢ 乃 の 記 あ

小野糸 八月廿四日 龍田作

秋戸 甲く秋殿と記と極らわらふこと

芭蕉 萱日るや如即記多と列す不人我

菅草 草不不捨計

水汁草 あり割草

水汁草 あり割草

水汁草 あり割草

水汁草 あり割草

水汁草 あり割草

水汁草 あり割草

水汁草 あり割草

水汁草 あり割草

水汁草 あり割草

水汁草 あり割草

水汁草 あり割草

水汁草 あり割草

水汁草 あり割草

月乃部

みやま乃部より

月の桂乃記

片桂のむくくは秋也

月日

とつた記より秋あり地月乃月日ま
乃日ましく秋ありあはくはる月日ま
あはくはる月日ま

星月表

月乃字より

盃乃光

あはくはる

中はくはるいさひ乃思

まはくはる
月日まはる

いふあが坊鳥

たのじ乃鷹
田よせり

かりのぬさひさくはる

鷹

千鳥をじしはる

秋乃鷹

秋ありぬ鷹乃秋の心ましく一向は
あはくはるはるはるはるはるはるはる

鳴

いさくはるまの音りあはくはるはるはる

鴛鴨小

り涼らましくはるはるはるはるはる

楸

秋ありらるはる

櫃

まはくはるはるはるはるはる

推

秋やいさくはるはるはるはるはるはる
たはくはるはるはるはるはるはるはる

推

はるはるはるはる

楓

あはくはるはるはるはるはるはる

五乃

勿論秋あり是れまのまはるはる

梨

實ハ秋也

柏

九月十日より

柞

九月十日より

短乃文

九月十日より

草

九月十日より

い

九月十日より

鳩

九月十日より

さ

九月十日より

燈

九月十日より

重陽

九月十日より

秋

九月十日より

仲

九月十日より

思

九月十日より

柞

九月十日より

野

九月十日より

山

九月十日より

愚草 結り 霜少心 森 白

小回り 結り 白

稲妻 結り 白

さう 結り 白

かた 結り 白

賞り 結り 白

胸乃 結り 白

か 結り 白

東 結り 白

次 結り 白

空 結り 白

衣 結り 白

つ 結り 白

子 結り 白

霜少心

白

結り

さう 結り 白

かた 結り 白

賞り 結り 白

胸乃 結り 白

か 結り 白

東 結り 白

次 結り 白

空 結り 白

衣 結り 白

つ 結り 白

子 結り 白

衾

あをきとじしめては秋や地す乃かこ
てい冬とさしり

葎

らりた色ともあてては地やらり白梅
草乃類あり

紅葉乃らり

い冬もあきとじしめては
秋やあけのちのしほり

川のお葉

あきとさしりては
あきとさしりては

とみら乃色れ朽ち

あきとさしりては
あきとさしりては

秋なり

あきとさしり

あきとさしり

うの紅葉

あきとさしり

紅葉乃色

あきとさしり

秋乃の秋さしり紅風

あきとさしり

秋乃の秋さしり山

あきとさしり

冬

十月更衣

あきとさしり

初霜

あきとさしり

田乃志々種

あきとさしり

弓場始

あきとさしり

あきとさしり

紅葉乃らりて

あきとさしり

とみらるる花もあかり

朽葉きこいふ葉もさそ 木たし乃ぬ

木乃葉衣 枯き乃柳きこいふ

木乃葉花乃お葉乃らるるも月まよふと

名草乃乃何何も冬や萩もく記おの枯

草さあの新も冬より 花乃部はなは乃入ゆり

乃く乃乃乃なとりのて冬や 乃乃乃乃乃るあてより乃乃

乃乃乃乃乃なやばや乃乃乃

月小志乃乃なや 月乃霜なや

霜乃乃乃乃なや

初雪見初雪 天皇延暦年中より

乃乃霜乃乃乃乃とて冬より

霰乃乃乃乃なや 乃乃乃乃乃なや

淡雪もあかり 乃乃雪

乃乃乃乃乃今冬 霰なや

乃乃乃乃乃なや

為水 勿論のちりうとくまりゆくゆと
してもおのり 政のちりうとくまり

氷のちりう しては冬より氷のいりあり
まふくまふくまふくまふくまふく

新嘗會 十一月中の
卯日あり ことよし御あり

豊明節会 十一月中の衣日やそ日
守り節会と云れまふく

ことよし御あり 大嘗会と御禊よあり
まふくまふくまふくまふく

小糸 賀茂祭時の冬より寛平の御あり
まふくまふくまふくまふく

日蔭系 十月十日と云若とくまり
てかんまふくまふくまふく

小忌衣 冬より神山の御あり日あ節の
まふくまふくまふくまふく

里神示 冬より冬より大裏乃外あり
まふくまふくまふくまふく

神示 冬より冬より冬より冬より
まふくまふくまふくまふく

末子 冬より冬より冬より冬より
まふくまふくまふくまふく

庭火 冬より冬より冬より冬より
まふくまふくまふくまふく

網代 冬より冬より冬より冬より
まふくまふくまふくまふく

冬より冬より冬より冬より
まふくまふくまふくまふく

冬より冬より冬より冬より
まふくまふくまふくまふく

口 恒季河

恒季と云ふ河なり
河なりと報するをい飯

飯訪糸

一と替り七午五度ありあり報也

柳

柳也柳よりと

飯原乃宮

恒柳也飯原と云ふ

葉守神

涼道

恒葉の守神なり

法乃寺ありあり心

心乃月

ころの心

心乃月

心乃月

心乃月の

月日

とつとつる河月日の

天乃心橋

水邊ありあり

いさしり

いさしり

催馬赤

催馬赤

美濃山

石川 葦垣

葛木

真金吹

於藤川

奥山

浅緑

河馬草

竹河

け殿

河口

倉垣

秀山

浅山

田中升戸

言嶋

婦門

大宮

長濱

東屋

定井

伊勢海

蓬生

若門

大井

浅多橋

大道

美柳

逢乃

何為

乃口

西寺

鶏鳴

雞鳴

浅也

以上様

言なり

是れ

い

孫壺

孫壺

孫壺

孫壺

孫壺

孫壺

孫壺

定赤

定赤

定赤

定赤

定赤

定赤

定赤

可赤

可赤

可赤

可赤

可赤

可赤

可赤

しと

しと

しと

しと

しと

しと

しと

松乃

松乃

松乃

松乃

松乃

松乃

松乃

まのこころみたりともきなり

松乃為葉 椿 ねをじよしてハキナリ

靱紅葉 とつて記さる 柏 これてのりことと記

青葉 形をじよし まの葉 アキ

赤い葉 赤なり夏こいし

山楳 あまなり報なり 津 遠海茅おも

紫 報なり 馬草 馬をじよし

いんげん草 をじよし 草 草なり

力乃靱 力なり 花 花なり

波素花 波なり 花 花なり

志願乃山 志なり

霞の岡 霞なり

清水 水なり 鳥 鳥なり

鳥 鳥なり 鳥 鳥なり

鷗 鷗なり 鷗 鷗なり

鳩甲 たの巣 じさく 報り

うけふ 報り けふふのもゆりともわい

藻小まじ虫 あか 報り

麻乃園 佛の法を鏡あつての麻理園なり

かひさして まじらふ 猪 狐うまか

顔乃雪 報り 眉乃霜 目あ

かき火 報り あつた

かき風 あつた

くさく いさ 報り

五 祓祇 くさく 報り

天岨戸 八咫鏡 真坂樹

神沼山 神山 神宮 鶴乃

羽々 ら 板枕

火燒屋 庭火 い

あまのう 乃類

よびへる水 出たて

小豆衣の敷 東越 来子

し女子の敷 羊の じま語

小へ御後 以部示うはし物事

韓非 毛活く 前帳う外

あ非祇乃初未回く 同回 罪い 五い

六 釋教 彼回用加しよまの 類列子不及死

鸞峯 鶴林 我ち杞

枝山 室乃戸 家と出

破小じふ 三車 三世

其曠 一夏あり す一夏とつりハ 釋教ありあ

じふ乃電 常灯 衣玉

山伏 二月乃列 六道

胸乃月 心月 権河し

ゆるしてハ 經文要文 ホカ編釋教

よりまを列り不及載

とて乃園 於麻路 曰於麻園

支常務 吉那れおく 出方野

小那乃奥 小那 かやま山

その海よの山那 三輪りさ記

をー海乃那く おとさあ

小伯那 す ふの おとさあ 山

言那乃松 津津那 ちら津津

津津川 黒橋 造り紀 おとさあ

仙人 炭焼 人備 氷室守 日向室

うら 薪 書文 止るを那

末乃字 猿 まの おとさあ 山

十 水邊 毎岸 おとさあ

恒名乃神 あり 那 おとさあ

敵生 神祇 おとさあ 洞物じよふ

法乃あ 三輪 おとさあ 松りさあ

石 郡の名 おとさあ 外

のなまを一切しあゆりしり

難波津 たななべ 清見寺 きよみでら

名取乃洞河 なとりのみほがわ 浦子河内園 うらこのくわいおん

といはたえり実の目北園ホを味よりの園ありと 海古小船 うみふるこぶね 山 やま

淡 あはれ 勿論ありゆり なげり 淡海崎 あはれみさき 山 やま

田叢嶋 たむらじま 三嶋 さんじま 標州乃三嶋乃 すまのさんじまの

海子乃嶋 うみこのじま 志賀村一松 しげむらいちのまつ

松嶋 まつじま 小嶋 こじま 収室 しゆむ 柳板 やなぎいた

舟をたたくて 波乃紀 なみのき 田井 のゐ 子洗乃水 こせんのみ

水雞 みづけい 千鳥 せんてう 水 みづ 千鳥 せんてう

行の葛蒲 ゆきのくわふ 水 みづ 千鳥 せんてう

水 みづ 千鳥 せんてう 水 みづ 千鳥 せんてう

水 みづ 千鳥 せんてう 水 みづ 千鳥 せんてう

水 みづ 千鳥 せんてう 水 みづ 千鳥 せんてう

水 みづ 千鳥 せんてう 水 みづ 千鳥 せんてう

水 みづ 千鳥 せんてう 水 みづ 千鳥 せんてう

水 みづ 千鳥 せんてう 水 みづ 千鳥 せんてう

水 みづ 千鳥 せんてう 水 みづ 千鳥 せんてう

水 みづ 千鳥 せんてう 水 みづ 千鳥 せんてう

五月廿二日 庭も海も 晴る候 うらやま

月乃て一か いとよしく せしうきり

北水邊 みきふ ぬまの へ

難波 ひらふと 寺の ちよき 志賀 田家ら ぬま

多ふと とらふと

恒音 とつり へん 音 白 はく

横川 か海山 彰り 比 ひ 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の

あ あ の の 思 の 思 粟 粟 乃 乃 乃 乃 乃 乃

松浦 姫 大井 乃 山 浮 浮 乃 乃 乃 乃 乃 乃

白河 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

三 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

尾上 岨 藪 坂 谷 鴻

この外山より 蜀 澁 洞 葛 塚

園のあたりに 山は体用乃かっつるやしといふなり 乃体なり

用之分

澁 杣 材 炭 竈

水邊体之分

海 浦 江 澁 堤 渚 嶋

與 磯 干 瀉 岸 汀 沼

河 池 泉 洲 洲 渚

澁 ナミのせいのりてと田か

用之分

波 舟 水 塩 水 室 淡

子 淡 舟 網 伽 踏 清 舟 子

かまのりて用なり

体用之外

浮 木 舩 流 垣 崖

垣燒 まのり 蛙 か 杜 ま 葛 ま 蒲 か

葦 蓮 真薦 ま 海松 か 和布

藤垣草 萍 ま 海人 奥 網

約密 罽 ま 下櫃 茂 千鳥

久馬乃類 水と云字なりわも用りなり

居下体之分

軒 庫 里 窓 門 戸

樞 蔓 架 隣 垣 いと体也

用之分

庭 外面 簾 関屋の居下二言
舞のハ体子不嫌関

又 乃扱ひきりて居下二言
いそく室乃戸窓居寺窓と出里非采所
階ホいと居下二言

雜物体用之事

假令云といふるよりと付て又川と云ふときも
付ていふるよりと付て又川と云ふときも
是体より由るよりと付て又川と云ふときも
い長といふよりと付て又川と云ふときも
是れ用よりいふよりと付て又川と云ふときも
既ゆりたりよりと付て又川と云ふときも

亦字

小竹田亦河亦心三准舟
思衣河亦心制可嫌め句

花

心と皆七
句古也

十五 雨の句

同十句く内可嫌
事

發句

いっやう乃内外の書籍中説をして
も工丈作意をめぐりてま

眼句

句よ多法又おあわしとあまふさうい
より多法は又おあわしとあまふさうい

宵三

より古なり申洗め記ふる事ある事
を脇乃心をもくわい一作たぐ内

はまよりよみれんくやの文字をいそと
らりたりありたり普通通ふてとありら

四句め

よりいはいはいよりくくとまやしたく
よりいはいはいはいよりくくとまやしたく

都古句

ともより十句たりあり他眼の句ハ
不告也愛といふ字も懐きく不若

世乃字紫花

懐海

郭公 愁支

まのやうなるまきとわたりりハ
はるまきと云脱あり他不若元云り

幸あり

より出たり事用といふことありハ
より出たり事用といふことありハ

浅茅生 河

より河十句の
より河十句の

と際限ゆへ

森

と云句よ々々
より二句川合て名前も成前也

一向てははるる記すなりるうは田舎院とくく
可きものもや地亭の心よきういふ

南方曰くめ 十冊とあるといふ院ありて
その地は都より可なり 西院あり

十六 梅廻之事

董 とよむりこころおと付て又紅紫まて付つ
とよむりこころおと付て又紅紫まて付つ

とよむりこころおと付て又紅紫まて付つ
とよむりこころおと付て又紅紫まて付つ

とよむりこころおと付て又紅紫まて付つ
とよむりこころおと付て又紅紫まて付つ

とよむりこころおと付て又紅紫まて付つ
とよむりこころおと付て又紅紫まて付つ

とよむりこころおと付て又紅紫まて付つ
とよむりこころおと付て又紅紫まて付つ

夢 といふなり西都下付て月を付て
いふなり西都下付て月を付て

いふなり西都下付て月を付て
いふなり西都下付て月を付て

いふなり西都下付て月を付て
いふなり西都下付て月を付て

いふなり西都下付て月を付て
いふなり西都下付て月を付て

いふなり西都下付て月を付て
いふなり西都下付て月を付て

遠梅廻之事 及ゆはとハ白く 香か
及ゆはとハ白く 香か

及ゆはとハ白く 香か
及ゆはとハ白く 香か

及ゆはとハ白く 香か
及ゆはとハ白く 香か

及ゆはとハ白く 香か
及ゆはとハ白く 香か

まのまゝ 志楓 志楓 志楓

梅乃ぬ しんがたをいへば 夏迄乃のうかたり
ありやうのふねとあわく世を問ひて

霧乃ぬ 霧乃ぬ

まのまゝ 蚊火焼 螢火

いふまゝ 蝉 いふまゝ

初時鳥 澄れ乃のうら一首
もとよりしんが こりかり

まのまゝ 祢らひり 毛のま

うら田 進乃乃つけ
まのまゝ 東川 鶴の心あつて
只いふまゝ

短分

短分 如麻 萩乃ぬ 萩乃ぬ

同くしんがたをいへば
とれをいへば 菊 菊草のうら一首
りし地をいへば

屋へきく 戸のまゝ
まのまゝ 明月 まのまゝ

あさ月 中月 田下月 まのまゝ

回りり まのまゝ 遠回 まのまゝ

霧乃ぬ 康乃書急 鶉乃り

うら衣 まのまゝ 赤葉

お葉かり

冬ふゆ分ぶん

神かみ引ひ月つきあけつづき 冬ふゆ船ふね 冬ふゆ炬たき

冬ふゆ風かぜ 冬ふゆ枯か乃の道みちふゆの道

冬ふゆ梅うめ 冬ふゆ華はな 鷺さぎ場ば うう比ひ馬ま

東あづま時とき白しろ 山やま 一ひと々つ々つ

しし々つ々つ 水みづ 小こ長なが 十月じゅうがつををととりり

日ひ付つけ霜しも 休やすみ霜しも 宿しゆく所しよ 左ひだり寄よ 右みぎ寄よ

意い分ぶん意ハ別ニ判テハハハハ

志し心こころ 志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ

志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ

志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ

中なかつ乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ 思おも白しろ書かき書き

乃の々つ々つ 遠とほ書かき書き 志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ

志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ

志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ 志し乃の々つ々つ

舟の折り紙 あけふしとる記詞海乃上り

幸新 夕電 う通月終のよあまり 通じ

石せり まこころ 竹乃指

まらぬ火 うく電 ふめのこころ

時—あれ も時—あれ

こころ こころ

はとぬの紙 はとぬの紙

ふれぬ ふれぬ

又上乃句よ嫌物り事

新うへ 新うへ 新うへ

まわて まわて まわて

さこ さこ さこ

乃とけ 乃とけ 乃とけ

しつ しつ しつ

ま ま ま

い い い

お お お

五月ぬり

鳴麻り 切もあま けふ福子

いとしのふも有りまゝのくすも有りては敷お
けいいつたもふも有りまじりていさありてん
えまり

上乃句れ つも有りありてい
しつーいさめまりましくはあつていさめまり

下乃句乃も有りま嫌敷の事
まろへん 乃乃へ 入ねまの

月いありのちとくはり
ありけし ころそ ねまこも

いかに不始つてけりま

い上乃乃句れ有りま嫌敷りまはがういたまはあや
ー下乃乃句のおも有りて有り千乃句あま二乃り
たる下しとれま下よは中用たまさこつて有り
わらやとあまの有りましくまありのちり嫌敷と
いとも古人乃翁句りありてましく一乃り
甲ハ翁句りいんけい ありまのりありま
う名通乃ねか有りあままこまひてい二乃り
身乃せいいの詞 ままと有りてありま
ままこはありのありていさなりけりありま
ま細りやま今人たりありまこまこ

十八 可思惟本

儒道釋教道 其外は乃乃たわりの
りや文学の害も等書と

鳥

鳥よの白の涼山遠蒼むとく付物くは只一二
物よといふかとむちささく折あるやれ他他よは
むと雪の白の一夜の清ゆるぬけ指の折あるやれ
有るよの道のり

海古推又

海古推又
うく物よの月やわらわおとあめあめとて海を
しそぬまをよありうくありくを

春夏

春夏
秋月乃用をうけしつは所くおのき
せんやれしを海をうけしつは不叶而
秋又名をうけしつは物く入力を記するなり

水

水
あり書よけを連文の字をうけく本とされ

哀傷乃句

哀傷乃句
初心のと記ある好もつうの若
の下又親ある人のたらし折の
あやをとりしり又教導の道よ名をえあるなり
体又屏風儿帳をうけしつは又君よつ人
てると云神児少人あり書よいつれは不似合
たると記かるとえゆう小つてく正風神と記
海よ小魚

老後乃句

老後乃句
又幼少あり時の心持乃りや
まふとていふとれせいあつさうらな
まをせめくしとていふとれせいあつさうらな
と老人の遊洲あり見替うてて載くそのの
よとのまよ入くう記世の中をいふま
り物りまなまといふは老るりういふるや

海節よま

海節よま
いけり他よ

はるる記力少く後代はて人の志をくまの
種よりくまの種よりいひしや
一用心とく

同意之事

句 同意 こと

假令字に風

まよふ冬ころの峰の風の
あふれるよの類

うぢも若さあまふさひ

とよむりぬまをくろくたふれ長閑なるよ
付り体毎度りりゆるまやきあふと二たひ
とよむりぬまをくろくたふれ

花とたを

まよひとよむり
是はひとよむり

花よりも柳よりもあまふさひとよむり
たよりぬまをくろくたふれ

野乃まけり

まよひ夏草たふれ体
みか同あまふさひ

霜

あまふさひ
りあふさひとよむり

高葉

まよひの柳よりもあまふさひ
まよひとよむり

増

まよひとよむり
まよひとよむり

心みかく釣魚

まよひとよむり
まよひとよむり

まよひ

まよひとよむり
まよひとよむり

あふ

まよひとよむり
まよひとよむり

り月さあ

同意
まよひとよむり

わさへらりそりも興り葉とらわらわサ相
とふく甲一也とわらわらつとまをわらわらけを
とて物に人あまり

十九 数句切字之事

哉 ぬ 今り そ やる ち

志 一 きぬ けらる

い けい ち ぬ いそ じき ふみのうら
いなる相

きり あり ぬ り けい けい

又下知 なる 又字 未 みふ切字なる

たの さら 哉 風 ぬ し 白 けり

葛の 葉や 向人 ち ちや けり

山 遠 一 一 きみの都や西まの志り一は切
是はけいふ一なる

う けい 一 一 ちり けい けい ぬ

ふのぬは不切是は
とてんぬや 後 けい ぬ 梅 けり

き なる や けい けい 雪 けり けい ぬ

月 けい けい 言 ぬ けり ち けい ぬ

花 けい けい けい けい けい けい

雪の山

是より下

月うさげ

あさ 明日と

おろへらるる

小節

あやうし

又面は

五月ぬい

柳

これ二句乃侍し... 草の葉や...

二十 句数之事

春短志

句二句より... 句の

夏冬を旅神祇釋教いよ二句あて

この句は

連懐く旧可き常在けぬといふ懐く常

句は三句おまりと云ふより二句は

常懐旧可き常常懐旧可き常

山類水邊居ふいよ神園乃美の

あり交みと

人倫二句ハ不若三句ハつづくへんらうなる人

植物二句つづくやし

乃三吟り植物は

九通りハ

生類二句より外つづく

二句より外つづく

女一本可取撰之事

廿五乃より三句より

月より心やい

山といふ

引らん

けりや

河川にすあはれりてふふのふらふらあはれり
たりて文人のふりいあはれり後部にてふふ
こみりて河川にすあはれりてふふのふらふらあはれり
中書後撰集とてとる用や古し集りたり十代
今集りて河川にすあはれりてふふのふらふらあはれり
ついでに代乃集り者たりて後部にてふふのふらふらあはれり
院とて百首集りてふふのふらふらあはれり
本言例他人のあはれりてふふのふらふらあはれり
用や依事りて河川にすあはれりてふふのふらふらあはれり
本言の例とてふふのふらふらあはれり
も用りたり又後部にてふふのふらふらあはれり
三句とて一他部にてふふのふらふらあはれり
うは後部にてふふのふらふらあはれり
あはれりて河川にすあはれりてふふのふらふらあはれり
中書とて三句用りて代乃集りてふふのふらふらあはれり
ついでに代乃集りてふふのふらふらあはれり
の流りたりて河川にすあはれりてふふのふらふらあはれり
うは後部にてふふのふらふらあはれり
あはれりて河川にすあはれりてふふのふらふらあはれり
名とて河川にすあはれりてふふのふらふらあはれり
又いふ河川にすあはれりてふふのふらふらあはれり
とて河川にすあはれりてふふのふらふらあはれり
今とて河川にすあはれりてふふのふらふらあはれり

亦二 物言下之事

先末のよみて貴人宗道孫若サ事ふよの配
乃神を足けくうひきつて一礼してつてつてつて
其言よりつてつてつてつてつてつてつてつて
他責人少人よの配つてつてつてつてつてつて
人よつてつてつてつてつてつてつてつてつて
あつてつてつてつてつてつてつてつてつて

其のつりまてまりとてしつし時よあまのたに
あひとめまふらふまふし是は道小いたふま
まわもあつひいふあまあひいよあまのま
まんとあまう小とあつりまふり自れま
官をよまもま記より見まふまは是と白羽の
一神より又まま乃奥よりまふまふまふま
りんま乃のまや下ま付つまふまのまのま
ふりり又ままを志まじまふまふまふま
らりまの俊者たつるま乃りまのまのま
ま用もや中まの機筆代事親ま材家門証ま
此西ままま上ままひまひまま又午ま
機筆代事乃のまま記よりまふまふま
ありま略ま
又いれ機筆十行法用ま
まは眼道 善人値遇 末上為ま
ま敬為媒 善能才一 不耕定稼

交朋を誦
自れ佛性

可友有登

必通神也

つまはついとま記ままままままま
い清なりまま一機まままま貴賤毛
ま僧僧とままままままま文字ま
つまのままままま入まままま
まままままままままままま

廿三 一塵法度之事

發句ハ一塵無いのを教ゆり庭あまま
ま山ままのまままま時節風景ま
ま目まのままままのまま発句脇才三の仕
まままままままままままま
へ 眼句 一塵無いのを教ゆり庭あまま
ま山ままのまままま時節風景ま

才三

ハ登る脇乃心と持しむら柳の枝を
二木ともよ折りしはれはるやうまじり
ありすもあわも平人の世用歎

いふおしせ馬

ふふこりおと登るよま
ととより思利るうりす

かたけ神

ささあひん句の軟教非祇
およそりめ句嬌より

釋教

と西懐とじとひさる句軟教の句

西懐く田を常

け三川合て三句まへ
一といたとく西懐
うり三所けくまへはと云後や西懐を二句
しと電たの句一句とわく金て三句といふこ
うり

西懐く田を常 衰傷

お乃及後
丑句嬌や大

西懐

り電た付て又西懐乃句と折
懐四句甲とるもるも用終り

徳

一と地作くよふ記るこまけりや
とと打あしと西懐石を折るくあ人の作
らあ方ととりとるくゆりさりさる
こくしへさ後よあし折る

四季の句

よと西懐乃句入
きりりともり釋教非祇志亦同

平媒

乃白子志の秋乃白竹
不乃竹と去とあ

雪月報

日御着雪とて又報とと
ま折るとくはと一雪月む

と云ふ乃所心風雅乃命魂よりそ一為の貴人
考人ヤ事と多と見えんといふれつゝうり
三つん後平人ともいへば自れ名を白と出
果たしんは不の及斟酌雷月むの礼儀けたの
考考考考考

文字あまり

新式よハ及奇談あるを斟酌
とあり一語よりつをを
たの後の一有用の字をゆりいさす五の終と
いふより名おかつあまのく月ハを明の
るといひよりささささのめいの中いりて
二三とささささささささささささささ
里いりてさささささささささささささ
あまのさささささささささささささ
とささささささささささささささ
とさささささささささささささ
とさささささささささささささ

裏一順

西乃一順再考乃とく又あり
とさささささ

あぢり句

長短とも一白をいあけと二白
よりいあけと二白
白とあけと二白
り人の從女人をいあけと二白
たさの白と不似合のよりいあけと二白
ちりめてたつてと不出入の白と二白

女曰云席作法と事

其席よりいあけと二白
夕よりいあけと二白
つゝ縁内外の書籍和漢乃古事と云ふと
校又いあけと二白
出立者いあけと二白
と不似合との後より早考考考考考

いふこといふことの特賤を極まるとも毎座よけふふら
ゆも初ん付まういおきりまうとて條物り去
らうと字通とひいこくへんこあし和字の
なまわくつまかめやうおとら心や博字の胸
よりやいこきやう初をいひおきりこをありう
ゆりなれとよりまうおきりまうの二支軍も出
たありん時ハ古事おとろくこれハ花實とまよ
ゆり奥ありあり又けいこくまう一寫時馬
おまやうまうのめも毎座よけふふら例のえりの
よむといふれていおきりこゆりゆり付て心
乃おこりありありとろく物りいさ世をけくふ
らぬまう人ありありとろく輪連すもたろく
ふよりおきりまうとまうとろくたろく人い
ゆりまうと付りまうと心りけさハこく時ハ
まのめまうゆとつけ又おきりゆさありありた
とまうとまうと付り付てまうとろく雷月報の
おまわらありえ又一し一奥ありまうとまうと
と初ありまうとまうとまうとまうとまうと
まうとまうとまうとまうとまうとまうと
たくとまうとまうとまうとまうとまうと

廿五 和漢篇

大概法を用連致式月事
和漢在以五句為限但至漢對句不及六句
景也草木亦負教和漢の通用事他面局以下略
と和漢名を用くとまうと頂面とあつこい
音と危山とまうとまうと二乃外とまうと
まうとまうとまうとまうとまうと
まうと異名就本体可定まうとまうと
式月乃和漢篇よいりんハ異名なり何括の字也
とまうとまうとまうとまうとまうと
乃外とハ百韻よ一乃おきりまうとまうと
まうとまうとまうとまうとまうと

用と只心より假令金鳥ハ日天象入りハ可嬌を類
ハ不ウ嬌々然ニウ嬌へウトトソリ可依ウ体

銀竹ハ白 生括り不燥銀竹の字ハハウ
嬌ウ

金衣ハ白 是ハ衣リ假乱一ウウ古事
有ハ衣類ニウ嬌ハ

烏衣ハ葱 是ハ一切リ衣類ヨウウハ
ハ

霜蹄ハ馬 霜ト只字五トハ一ウ為蹄也
冬序ハハハハ然ウ依ウ類

鯨ハ鱗 勿論ハ類ハ過ウハハハハ

一座一ウ也

新鬼ハ類 ハ適款之類或月ハハハハハ

洞扉玉章免狐 ハハハハハハハハハハ

二ウ也 ハハハハハハハハハハ

去風 枉風 ハハハハハハハハハハ

紫 紫柳 替折ハ用ハハハハハハハハハハ

坂音 嶋 漸 海 江 堤 清 ハハハハハハハハハハ

磯 沼

三ウ也 ハハハハハハハハハハ

紅葉 又ハ類 新式月ハハハハハハハハハハ

宮 皇居より一神祇より又皇居神祇の外より
多し二とありとも多し三ありと一はと三也

四句也 可替新

和 雪 玉 空 いつれとさ方なりと
りよ不及は

五句物 一六面と入るま

世 梅

春部

新 心 歳乃首也 淑 氣 春の心なり
るる侍る

管 律 黄帝作律と云 貞 茶 春なり

絮 柳のさや 暖 芳 春の心 紅 日 影

踏 草 春草を
少心なり 芳 草 春草なり

燒 痕 秋の燒原より
ありあり 鷓 鴒 春なり

山 梁 おの影なり 蜂 春の影

夏部

新 緑 新樹甲 清 和 日月のさや

霜 長ぬのさや 黄 梅 梅のさや

黄 夏 夏樹時節の
さやなり 白 夏 おの影

麦秋 わよいあき

重葎 あまの

薰風 いつしきのうき

辰部

初涼 秋涼目 残暑 初秋の初

金氣 秋の金の言 爽 秋のころ

懸鶉 衣のや 弃扇 あつせき

荔枝 秋のや 黄柳 秋の柳

孟嘉落帽 九月のころ

冬部

凍柳 冬柳 凍蝶 冬蝶

枯 草の心 探梅 早梅

丟信 丟信 ちり ちり

爆赤 爆赤 儼名 儼名

山類

雪山 天竺の雪山

岫 山 炭竈 山

水邊

湖鏡

只湖のまや 湾 水曲らり

一糸

糸の通り 釣 白糸や

峯海

北の邊

硯池

白糸の池 白糸

釋教

禪

冬禪

定

入定

錫

錫杖

經

僧

祖師乃名

南懷

名利

名を思利を重んずる

藝

世のまや

浮祿

衰顔

白頭

老

物名

隱

遊

退

疎業

憲部

御字待

和鏡

園怨

河海集

曉粧

黛

義人

列字

但是ハ

白糸

駕卷

右衾

右衽

結鏡

白糸を結ぶ 白糸の結 白糸の結

昭陽人 入部

楊貴妃

此は存する一高きあり
此之故の文は百首

孫部

信

言信りあり

客

物實あり客實客と
稱りあり

遠心

心夢

一葉力

漂泊

心

征人

友山

由字

一の依り

人倫

云

侯

伯子

男

以上是のみふの
諸侯あり

士 汝

以上人倫あり人の名と人倫あり

帝王

祖師名

松蔭

弁友

姓

以上人倫あり

支体

顔

嬰

以上乃新人倫あり

生殖

梅曆

梅暑

葉ぬ

杏酒

草花酒

枇杷酒

枇杷の

生殖

竊材 拾枯 伐木 藤杖

枇杷馬 枇杷草 枇杷粥

梨香 嚼瓜 菜 含蘭 燒香

いとけ殖りあり

北東分類

被 暗音 春山夢 胡蝶夢

付勺可嫌物

玉章 洞 偽 真 攻 引

木の類 如 与 葉 似 於

是 新 可 葱 青 緑 蒼 小

白 素 地帯

蝶打越物 分 ハ連致あり

進支 又字 顔 見字 あけ之類

二勺可隔物

月 日日 星 あけ天象あり

朝夕 曙 鈴 あけ替り

雨と 疾と 霜と 雷と 鳥と 獸と

虫と 馬と 木と 草と 草と 草と

竹と 草と 人倫と 人倫と

遠と 近と

三句可隔均

山類と 山類と 山と 孝と

山と 山と 水と 池と 池と

衣と 衣と 衣と 草と 草と

獸と 獸と 衣類と 衣類と

同訓と 同訓と 國名と 國名と

名所と 名所と

五句可隔均

同字 非祇 釋教 正懷 志

猿 月 松 舟

七句可隔均

同季と 必連致と

句教之事

春連うの 夏冬 日 忘 田 神

祇 釋教 猿 鹿 山 類

水邊 居下 東分 生殖 生類

浮物 浮舟物 人倫 衣類 いさぎよ

國名 名取 人名 り出之類二句續也

十句之内禁制之物 如連教

不祥字

人名 ホの類

一座より一句のわハ和漢ともり出以才た平し

二句のわハ一宛する

和漢二本宛する人——自余乃景也とわたりし誰と

和漢小ハ漢乃方より——韻字より——漢和より

和漢ともり韻字ある也

百韻よりハ漢の十句和五十句なる也——地在懐

紙よりハ多々ある也

聯よりハ体用乃可也と云流ありある也

体用是文のよきなる也——其十年集也

有

和漢よりハ奉句可為漢漢和より和句なる也

祇居亦亦とわたり伊呂波の初は季部 下小

悉也

右い篇より記より外ハ可守連教新式目と法

度者也

け上下巻を去天正七年わ二
と皆あまりの事と記と同十三年
孟冬にわらふる事と記色は眼
の披見は入かやまをれ又と
て再三校合とつけ類重と字の
り用括の詞とくふふあふあ
風雅の食草衣乃意よあ
ふあよあく十有余年土壘奥の

まことかひ其後巴老は書し
蒙りよふくぬらう一度あり
り。のふらうしうり二をい函底
といふ。其中書と又徳以計披
図あり書敷也。于時傍人竊よ
是とて写し。且流布ととら
祿のうくは。祿未史乃舊中を
原あり慶長改作乃新書也

用小の志。一。年正月上衛。
清書。一。二。三。子。よ。あ。く。や。
ゆ。の。く。地。見。と。向。ま。ら。わ。れ。門。
よ。入。く。其。理。智。と。一。記。中。の。儒。道。
い。赴。て。ハ。そ。徳。行。と。あ。く。と。
ま。ま。小。の。志。と。い。う。一。親。師。の。心。
者。と。け。く。勢。た。い。ら。く。よ。宰。守。
の。晝。寝。祝。斂。の。辯。侮。の。こ。少。く。時。

日よふくまんとあはれゆき
の笑あめよ枝乃葉よ朽え思
賢の心さるく海もまよふて
しつ積り雪ふもまよわくは
造ひも願ひも妄念と
ぬらふまらり和音より
るしりしり天正元仲冬との五日
小世と出て山よ入標集後水乃

功一十三年一寺社修造八十一
宇高野山の見霜女五天
鈴とて小六十二の葉輪の
茶くくわらんらんよ高祖入定の
曆教よあはれりう記世乃世一
りしりしり一息の終らん夕と
乃こまりの誠感妻乃こまり
極悲生みのしりしり一瞬よいぬ

らひけ一冊女筒年のあま祢
垣や梅乃ち枝よ白ひそく急
しうたかこころかむこころ無夢ま
よりうきめて筆をさし今又清
書轉軸乃あつらひ霜小入下
葉ハ露のめくこれといつる夢想
あり夢入りおこり夢まよおこり何
まよも浮橋乃あやう記といつり

みまらせうをけういさりつじま
しと新書盡らん時いりぬきく一日
乃たろくこきく一念のうらひり
ひとよ勧善控悪のほよめね
たるくしほ洛陽東山大佛殿奥
院樹下小く慶長二年正月廿八
日書く世間のほこりいふこと
いとひさるれ有為乃むりあきしよ

る記きて三業成行しん不
ちり意始を終を言物に終
阿字諸法を不生の理と終と

南山允食法門

此を言物と云ふ小末代の重宝
なるや真山上人のあふ海より和
方浦よ心きくつと大師由なを
終い神當家よ心とありせ金堂大
塔を其外前くた修造ありあるに
塔を成能きり大佛供養の後を
山あり室よあやうんとあり風櫃の
道を行くつたなる記よあり

此無言抄之作意者兩與書
在之不意被 穀覽御感不
斜故寫留之任 勅定漢筆
者也

唐長三年

二品親王空性

此言抄之外題其被深

勅筆 再大覺寺殿 二品親王

與書也一覽之以上人係不
中紀之而已

唐長三年

法眼結巴 京判

此一部

禁中一冊上

勅復より老筆と傳ひまゝに
あつた

天子へ奉進献をうへての
自力授命一物りも不禮正
飯道寺梅本坊先達行着依
又此奥書とくへて所升
子思ひもてり此の比も

乃續尊とよまゝに
その上にもあつて若
又しきあつて
いそ入りのあつた
吾言抄の名りもつた

慶長八年正月十日

本食奥山上人慈其

判

新編の物集り之下

二言抄卷之下

元和九年五月中旬

元和九年五月中旬

中



